

「**しんじてんか**」 使徒言行録16章25節～34節

I 導入部

おはようございます。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝いたします。今日は第五週目の日曜日ですから、賛美礼拝としての礼拝です。

10月31日は何の日かと言いますと、ハロウィンではありません。最近、ハロウィンで、いろいろな衣装をつけて渋谷の街に繰り出す様子がテレビのニュースで放映されており、年々拡大しているように感じます。ハロウィンも基督教の行事だと思っている人が多いようですが、ハロウィンは基督教とは関係ありません。収穫感謝は基督教です。10月31日は、ハロウィンではなく、宗教改革記念日です。週報に説明してあるように、今年は宗教改革から500年目に当たります。歴史を見ると、500年ごとに偉大な人、大切な役目を担う人が起こされているようですが、そろそろ2000年時代に現れてもよいような気がします。

マルチン・ルーテルは、信仰（恩寵）によって救われることを強調し、信仰のよりどころを神の言葉である聖書にのみ、求めたのです。私たちは信仰によって救われ、聖書の言葉で生かされるのです。

今日は、「**わろてんか**」の第二弾で、「**しんじてんか**」という題で、使徒言行録16章25節から35節を通して、お話しいたします。

II 本論部

一、私たちにできないことをイエス様がして下さることを信じる

神様は私たちがどうすることもできない時に、神様のほうがして下さるのです。

九州におられるある先生が書いている文集があります。小学1年生の女の子が家に帰るとお父さんがいました。「**今日はどうだった。**」とお父さんが聞くと、「**宿題がある。**」「**どんな宿題。**」「**家の人に抱っこしてもらおうという宿題**」で何人に抱っこしてもらったかを競う宿題のようです。この女の子は「お父さん、お母さん、おばあちゃん、おじいちゃん。お姉ちゃん二人に抱っこしてもらったので、6人に抱っこしてもらったのです。

翌日、学校へ行って、「**何人に抱っこしてもらった。**」という先生の質問に、1人、2人。3人。4人。5人。6人すごい。この女の子は、6人なのでほこらしかったのです。お父さんが、「**そんな簡単な宿題はらくちんでいいね。宿題しない人はいないだろう。**」と聞くと、一人いたというのです。先生が、「**宿題してこなかった人。**」と言うと、「**はい**」と男の子が手を挙げたのです。「**前へ出てきなさい。**」と先生が言ったので、きっと叱られるんだと思い、彼女は目が開けられなかった。見れなかった。しかし、ぱっと目を開けて見る

と、その先生は、なんとその男の子を抱っこしてあげていたのです。しかも何回も何回も抱っこをしてあげていたのです。

抱っこしてもらえない子とは、どんな家庭の子でしょうか。家族が崩壊している家庭でしょう。この宿題を出した後、「**しまった**」と先生は思ったでしょう。彼は宿題をしてこなかったのではないのです。宿題、つまり、抱っこしてもらうことができなかったのです。家に「**ただいま**」と言って帰っても誰も迎えてくれない家はあるのです。夜遅くまで仕事でお母さんが帰ってこない家、誰もいない家もあるのです。

この少年は、抱っこしてもらおうということは自分ではどうすることもできない。だから、自分ではどうすることもできないので先生が親に代わって何回も何回も抱っこしてあげた。この女の子は、「**ちょっとうらやましかった**」と書いているそうです。

この先生は、この少年のできないことを先生の力でうめてあげたのです。これを恵みというのです。私たちは、自分の力では正しく、清く生きることはできないのです。自分の力ではまっすぐに進むことはできない。自分の力や努力で罪を消すことはできません。私たちは自分で失敗した過去を変えることはできません。自分の力で死を克服することはできません。そのように。何もできなくなってしまった私たちに、究極的に神様が代わって私たちに慰めて下さり、私たちに生きる力を与え、永遠の命を無条件で与えるというのが福音なのです。これが、ルターが語った信仰のみ、言い換えれば恩寵のみ、神の恵みによって私たちに救いが与えられるということなのだと思います。

二、環境に左右されずに、環境を支配されるイエス様を信じる

今日の聖書の箇所は、有名な箇所です。パウロが第二回伝道旅行でフィリピに行った時の出来事です。フィリピは、ヨーロッパ伝道の最初の拠点となった場所です。フィリピは、政治や生活習慣上の小ローマが出現したと言われている場所です。

フィリピでは、最初にリディアとその家族が最初に救われました。そして、リディアの家を根拠地として、フィリピ伝道が展開されていくのです。

このようにパウロのフィリピでの伝道は、最初の出だしは良かったのですが、パウロとシラスは、占いの霊に取りつかれている女奴隷から霊を追い出したために、その主人たちから訴えられて、つまり、主人たちは、金儲けができなくなったので、主人たちは、パウロを訴え、パウロとシラスは、役人に引き渡され、鞭で打たれ、牢に投げ入れられたのです。

そのパウロとシラスは、真夜中に何をしたのかと言うと、「**賛美の歌をうたって神に祈っていた**」とあります。私たちが、神様に賛美をささげる時と言うのは、礼拝に出席した時、成功した時、調子のよい時、いい事があった時、神様に賛美するということはたやすいことでしょう。けれども、苦しい時、悲しい時、絶望を経験した時、生きがいを無くした時、失敗した時に、神様に賛美することはとても困難な事だと思います。

パウロとシラスは、フィリピ伝道の最初はうまくいっていたのに、天から地に落とされたような、自分たちの何かで苦しむのではなく、どちらかと言うと、占いの霊に取りつかれている女奴隷から霊を追い出したという良い事（汚れた霊につかれ、金儲けの道具とし

て利用されたていた女奴隷を助けた)をした結果、投獄された理由は、女奴隷から霊を追い出したかどではなく、パウロとシラスが町をかき乱しやってはならない風習をはやらせたという無実の罪で鞭うたれ、苦しめられ、牢屋に入れられたという踏んだり蹴ったりの状況の中で、喜ぶ、とか感謝するという理由をどこにも見出せない状況の中で、身体の痛みと理不尽な苦しみの中で、「**賛美の歌をうたって神に祈っていた**」のです。詳訳聖書には、「**パウロとシラスが神に祈り、賛美の歌をうたい続けており**」とあります。神様を賛美し続けたのです。歴代誌下20章には、ヨシャファト王が、アンモン人とモアブ人の大軍に攻められた時、「主に向かって歌い、主の聖なる輝きをたたえる者たちを任命し、彼らに軍隊の先頭を進ませて「主に賛美せよ、その慈しみはとこしえにと彼らが賛美の歌をうたい始めると」アンモン人とモアブ人の軍隊は互いに戦って自滅した」と記されています。

賛美の力、主をほめたたえることは力であり、信仰を現す大切な事なのです。青葉台教会の聖歌隊も、賛美のレベル云々よりも、信仰、霊性が祝福されて喜んで賛美していただきたいと思います。

パウロとシラスは、自分たちの今の状況、無実の罪でとらえられ、鞭打たれ傷つき、痛みと苦しみの状況を神様に訴えることもできた。「**なぜ、このような目にあわされるのですか**」と神様につぶやくこともできました。神様の言われる通りに、フィリピに来て、神様の導きに従ったのに、こんな目にあつたと自己弁護することもできました。このように、神様の訴える口実、神様につぶやく口実、自己弁護できる口実があるのにも関わらず、彼らは、そのことをしないで、「**賛美の歌をうたって神に祈っていた**」のです。

パウロとシラスは、どうして、このような苦しみの中で、痛みの中で、神様に賛美と祈りをささげることができたのでしょうか。なぜ、神様につぶやいたり、文句を言ったりしなかったのでしょうか。パウロとシラスの霊性が高くて、信仰が篤かったというのも答えのひとつかも知れません。やっぱり、私たちとは違ってパウロとシラスの信仰が篤く、深いから、あのようなひどい状況でも、つぶやくことなく、文句も言わず、神様に賛美と祈りをささげることができたのだ。私とは違う。私なら神様にくってかかるから、私の信仰は小さく、弱いんだ。そうなのではないでしょうか。パウロもシラスも私たちと同じ弱い存在。小さな者であると思います。パウロとシラスは、自分が信じているイエス・キリストというお方が愛の人であり、全てをご存知であり、最善の事しかなさらないということを疑うことなく、信じ、イエス様に全てを委ね、お任せしていたので、どんなにマイナスが深くなろうとも、そんなことは関係ない。イエス様が一番良い事をして下さると信じたので、身体に鞭の痛みが残っていたとしても、牢獄に入れられて心が騒いでいても、神様に賛美し、祈りをささげることができたのではないかと思うのです。

私たちも理不尽なことを経験することがあります。信仰ゆえに苦しむこともあります。「なぜ、どうして」と神様を疑ってしまうような出来事に遭遇します。けれども、イエス様は生きておられるのです。私たちのために命を与えるほど愛して下さったイエス様がどんな場所にいても、どのような悲惨な出来事を経験しようとも、あなたのそば近くに、共にいて下さるのです。そして、最も良い事、最善を行って下さるのですから、私たちもパウロとシラスのように、神様に安心して、全てをお任せしようではありませんか。

三、100パーセント(JESUS)イエス様にお任せする

そのような信仰の姿勢、神様に対する絶対的な信頼のゆえに、神様は牢の戸をみな開き、全ての囚人の鎖を外してしまわれたのです。そのような神の業のゆえに、囚人は誰一人逃げることがなかったのです。この牢の看守は、囚人が全員逃げたと思い込んで自害しようとしてしまいました。囚人を逃がした罪は大きいものです。その罪の身代わりに自分の命を犠牲にしようとしたのです。けれども、パウロの「**自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。**」という言葉に、看守は明かりをもって牢に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏したのです。神の業の前に、恐れおののいたのです。そして、「**先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。**」と尋ねたのでした。

31節を皆さんと共に読みましょう。「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。**」 救われるためにすべきことはただ一つ、信じることです。「しんじてんか」なのです。 イエス・キリスト様を自分の救い主として信じるのです。

「信じる」という言葉には、私たちの側の何かがあるようにも感じます。私が信じる。私の信仰のように、私たちが自分の力で、信じるという業があるようにも思えます。

エフェソの信徒への手紙2章8節には、「**事実、あなたがたは恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。**」(エペソ2:8)とあります。パウロは、神の恵みにより信仰によって救われた、と宣言するのです。そして、それが自分の力ではなく、神様からの賜物、プレゼントだということです。

現代訳聖書では、「**あなたがたが罪から救い出されたのは、神の恵み以外の何ものでもなく、それは、あなたがたが信仰をもって受け入れたからである。そしてそれは、あなたがたが自分の力で獲得したものではなく、神が賜物として下さったものである。**」(エペソ2:8)とあります。

私たちの魂の親である神様は私たちを愛して下さり、私たちが罪によって滅びの道を行くのを忍び、私たちを救うためにイエス・キリスト様をこの地上に送り、私たちが罪のゆえに受けるべき罰をイエス様が代わって十字架で受けて下さいました。十字架刑という最も残酷で恐ろしい刑を受け、痛みの極限まで経験し、ご自分の尊い血を最後の一滴まで流して下さい、その尊い命をささげて下さったのです。私たちの身代わりに死んで下さったのです。そのイエス様の十字架での苦しみと流された血とその死を見て、神様は私たちの全ての罪をお赦しになったのです。罪ある私たちは、神様が救いのためにしてくださったイエス様の十字架と復活を信じることで私たちの罪の赦しと魂の救い、永遠の命を与えて下さったのです。信じるというのは、イエス様が私たちを愛するがゆえに、私のためにご自分の命をささげて下さったこと、私のために血を流して下さい、私のために苦しんで下さったことをありがたうと感謝することなの事です。この感謝するという心が信じるということにつながるのです。神様が用意された救いの道信じて、一歩踏み出すことなの事です。「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。**」という言葉信じて、イエス様に自分の人生をお委ねして歩もうではありませんか。

Ⅲ結論部

椎名麟蔵（りんぞう）という作家がいました。彼は、カールマルクスに影響を受け共産党に入ります。その後、特高に検挙され、獄中でニーチェの「この人を見よ」に影響を受けます。その後、聖書に向かい合い、キリスト教に影響を受け、日本基督教団上原教会で赤岩栄牧師から洗礼受けました。彼がクリスチャンになって、初めての小説が「公園のボート」という短編小説です。これは、倦怠期を迎えた恋人同士の物語。デートで公園の池でボートに乗る。男性の名前はモリオ、女性はクラコ。ボートに乗っている時に、ちょうちょうが飛んできて、「ちょうちょうが」とクラコさんが身を乗り出した時に、バランスを崩して転覆して池に落ちてしまう。彼女は泳げなかったのです、おぼれるのです。「モリオさん、助けて」と叫ぶ。しかし、モリオは一向に助けようとしません。冷たい男、モリオの正体見たり。けれども、このモリオが大きな声で怒鳴っているのです。「立てるって言うてでしょう。」クラコが立つと水は腰の所までしかない、という話です。

しっかりと立ったら立てる所でおぼれているのです。下には土台があるのに、これ以上沈み込むことのない地面がある。土台があるのに、しっかりと立たないからおぼれて、平安を無くし、もうだめだとなるのです。「立つべき所に立つ」ことなのです。救いの土台は、私ではないのです。私は救われているという実感ではないのです。実感に頼るといい時は救われているようで、調子が悪い時は救われていないように感じるのです。

立つべき所とは、神様が私たちのためにして下さった歴史的事実であるイエス・キリスト様の十字架と復活です。この神様が用意して下さった救いを信じるのです。

エペソの信徒への手紙の2章8節の言葉は、リビングバイブルでは、「あなたがたは、神様の寛容さのゆえに、キリスト様を信じることによって救われたのです。しかも、そのキリスト様を信じることも、あなたがたから自発的に出たことではありません。それもまた、神様からの贈り物なのです。」とあります。私たちがイエス様の十字架と復活を信じるということも、私たちの自発的なことではなく、神様の賜物、プレゼントなのです。「しんじてんか」と問われる神様に、「しんじませ」と答えて、この週も歩んでまいりましょう。

私たちに、今どのような大きな重荷、重い重荷があってもイエス様は負って下さるので、そのすべての重荷をイエス様に負っていただいて、イエス様について、いやおんぶしていただいて、イエス様にまるかかえしていただいて、この週も歩んでまいりましょう。